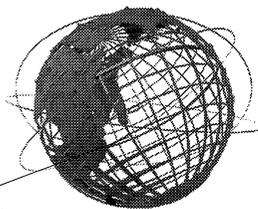


山形辰史

Yamagata Tatsufumi

1963年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業、ロチェスター大学大学院修了(Ph.D.)。現在、日本貿易振興機構アジア経済研究所開発研究センター開発戦略研究グループ長。著書：『開発経済学 貧困削減へのアプローチ』(共著、日本評論社)、『やさしい開発経済学』(アジア経済研究所)ほか。



国際協力の罪と罰： 買わない日本人

●国際開発にも成果主義

会社でも学校でも結果を問われる時代になった。会社では賃金のうち年功序列的部分が縮小され、業績給部分の割合が増えている。大学生の成績も、以前より明確な基準を用いて、学生の間には明白な差をつけて採点することが要求されるようになった。これまでは時間や努力等「何をどれだけ投入したか」が基準として重視されていたのに対して、最近では「何をどれだけ実現したか」という成果が重視されるようになってきている。

国際開発にもこの成果主義が浸透しはじめている。2000年の国連総会でミレニアム開発目標が採択され、2015年までに世界の貧困人口を1990年の値の2分の1にまで減らすこと等が合意された。この目標はほとんどの後発発展途上国の間で共有され、この目標に沿って貧困削減を達成することが、これまで貯まった過重な債務の棒引きや、世界銀行・IMFからの譲許的融資の条件とされている。各途上国は貧困削減戦略書(Poverty Reduction Strategy Paper: PRSP)という貧困削減計画を作成し、およそ3年ごとにそれらの計画が実行されていなければ、予定通りの債務削減や融資が受けられない。貧困削減の成果が上がらなければ予定通りの援助という報酬が受けられないのである。

●日本の貢献度は最低!

ミレニアム開発目標は途上国のみならず先進国も含む世界全体に要請された目標である。これを達成できなければ、先進国の姿勢も問われてしかるべきである。これまで先進国の国際協力パフォーマンスの程度を計る合意された基準はなかったのであるが、昨年アメリカのCenter for Global Development (CGD) という研究所が policy coherence という概念を打ち出し、先進国の政策



バングラデシュ縫製工場働く女工さん達

が発展途上国の人々の厚生向上に整合的(coherent)であるかどうかを示す指標を作成した。この指標は開発貢献度指標(Commitment to Development Index)と呼ばれている*。

この指標でみると、日本は援助、投資、移民、環境、安全保障、技術、貿易に関して、採用している政策やそれに伴うパフォーマンスが、発展途上国の発展への寄与という点で最下位である。この最下位という評価は昨年引き続くものである。援助額で世界最大になったこともある日本が、援助に関して低い評価に止まっているのが注目されるが、これは援助額そのものではなく援助額の対GDP比が用いられていることと、融資については融資額マイナス返済額が純援助額としてカウントされていることによる。

この指標は安全保障等、評価の分かれる変数も扱っていることから、国際的に高い信頼を得ているとまではいえない。しかし、この指標が先進国の国際協力貢献度を初めて総合的に評価したものであったことから、大きな注目を集めている。この指標の値が低いことは将来、日本に何らかのペナルティを課す、という論理につながりかねないので注意が必要である。

●買わない日本人

筆者はこの指標に据わりの悪さを感じる一人であるものの、こと貿易に関しては日本の得点の低さに思い当たる節がある。というのは、近隣の東アジア諸国・経済が1970年代から90年代まで経済発展を遂げるに際して、日本は主にそれら国・経済へ中間財や資本財を供給する役割は担ったものの、完成品を輸入する市場としての役割は比較的小さかったからである。現在も衣料品等々の中国

からの輸入は大規模であるものの、アメリカのように世界中の国の輸入を吸収する市場としての役割を日本が果たしているわけではない。

筆者は2001年にバングラデシュにおいて縫製業の企業調査を行った。バングラデシュは現在、世界で十本の指に入る衣料品輸出国であるが、その仕向け先はアメリカとEUに二分されていて、日本への輸出は皆無に近い。外貨獲得、女性の雇用創出という意味で同国の貧困削減に大きく貢献すると期待されている業種の輸出が、なぜか日本には閉ざされているという印象をバングラデシュ人経営者達は持っている。したがって調査の際、こちらが日本人だとわかると、「調査するのはいいが、そもそもなぜ日本はバングラデシュ製の衣料品を買わないのか?」と問いつめられることがよくあった。日本では洪水の多い最貧国としか見なされていないであろうバングラデシュは、実は輸出の4分の3以上が製造業品(ほとんどは衣類である)を占める「製造業輸出国」なのである。国際的に何かと規制の多い衣料品とはいえ、1980年代初めからアメリカやEU向けの輸出は急速に伸びているのに、1人当たり所得では同程度の日本にはなぜか商品が売れないことをバングラデシュの繊維関係者はいぶかしく思っている。

●好みのうるさい日本人?

これについて皆さんはどう思われるだろうか。100円ショップでバングラデシュ製の安いTシャツが売っていたら買いますか? 友達何人かに尋ねてみた。答えは否定的だった。「安くたって、すぐにだめになるようなものは逆に高くつくからね」と答えた人がいた。しかしそれはアメリカ人でもヨーロッパ人でもわかるはずだ。「日本人は細かいところを気にするから」と答えた人もいた。そして、細かいことを気にするかどうかはこちらの勝手だろうと。それはそうだろう。しかし、それがゆえにバングラデシュの商品は欧米では売れても日本では売れず、日本は協力的でないと思われて、印象を悪くしてしまうのであれば、ないがしろにはできないのである。

*この指標の詳細についてはCGDのホームページ(<http://www.cgdev.org/#>)や小浜裕久・澤田康幸「『先進国の開発貢献度指標』の順位付けをめぐって」(『世界経済評論』2003年7月号)を参照いただきたい。